



① 自民党総裁選で旧宏池会系議員が音なしなのはいかにも残念なことだ。保守本流が消えかかっていると言ってもよい。持論だが中選挙区制であればこんなことはありえなかった。田中秀征『自民党本流と保守本流』（講談社、1728円）は、岸信介を始祖とする潮流を自民党本流と規定する。リベラルな保守本流に対して、真逆の歴史観、経済観、憲法観を持ち続け、今、安倍首相へと行き着いている。

ただし本書では、岸にはかなり紙数が割かれはするものの、保守本流の源流である石橋湛山

から田中角栄、宮沢喜一、橋本龍太郎、小淵恵三、細川護熙、加藤紘一まで保守本流の人たちの描写と本質論が中心で多くは絶品である。どのエピソードも面白く、歴史のイフが多々盛り込まれているのも興味深い。あるべき保守の姿が示され、日本の国のかたちにも言及して、政治分野では昨今、屈指の良書と言える。

② 経済倶楽部で講演をお願いしてほんとに良かったという経済学者は率直に言ってそう多くはない。良質の講演を拝聴するのは司会者冥利に尽きる。神野直彦『経済学は悲しみを分かち合うために』（岩波書店、1944円）は講演のエッセンスをまた何っている味わいである。半分は母から教えられた「おカネで買えないものを大切にする」「偉くならない」を守り続け

る中で家族、同僚、師との温かい絆の自分史、半分は財政社会学を自ら確立する中で「人間のための経済学」を目指した学問的挑戦の論考だ。

2003年に著者が石橋湛山賞を受賞したときの故宇沢弘文氏のお祝いの辞が序章にまず出てくるが、こんな温かい、本質を突いた言葉を頂戴できる人は幸せである。そういえば宇沢先生も経済倶楽部で奔放な講演をされた。新自由主義批判が話の中核だった。とまれ経済学の現状を憂う人には格好の書物であるだろう。

③ テレビも本も西郷ブームだ。だが原田伊織『虚像の西郷隆盛 虚構の明治150年』（講談社文庫、928円）は西郷の実像を明らかにして一歩も譲らない。西郷は嫌われ者だった、江戸無血開城はフィクションで、赤報隊を使い捨

てにし、軍好きで戊辰戦争も西南戦争も積極的に深入りした、など定説の誤りを次々と明らかにする。それも史料を駆使してのことだから多くの人が納得するだろう。西郷好きには申し訳ないが、文庫書き下ろしの本書は見逃せない。なお著者も経済倶楽部でいい講演をしている。

④ 書名に引かれた篠田航一『ヒトラーとUFO』（平凡社新書、820円）は、ヒトラーがUFOで…という話ではない。ドイツのいわゆる都市伝説を探ったもので、ビレフェルトという「どこにもない町」の話、人が忽然と消える「オルレアンの噂」をはじめとする話、「ハーメルンの笛吹き男」など子どもたちが誘拐される話など、どれも面白い。時代や風土、宗教、潜在意識などの背景分析も納得がいく。（浅野 純次）